

『冷泉持為注古今抄』の「顕昭説」

——中世『古今集』注釈書にみる対顕昭意識——

山 崎 真 克

はじめに

顕昭は、その生涯において数多くの注釈書を著しているが、『古今集』に関しては、『袖中抄』に『古今集』に詠まれた歌語を取り上げているほかに『古今集注』・『顕注密勘』という『古今集』そのものを注釈した書を残している。『古今集注』は、奥書から明らかのように、寿永二年（二〇二）に序注が、文治元年（二二五）十月から十一月にかけて歌注が一応の完成をみて、守覚法親王に献上されたものである。また『顕注密勘』は、知られているように、顕昭の『古今秘注抄』に定家が密かに勘を加えたものである。『古今秘注抄』の成立年代ははっきりしないが、久曾神昇氏は、寿永元年乃至二年春頃に成ったとされている^①。定家の加注時期は、奥書から承久三年（三三三）三月であることが明らかである。

こうした顕昭の『古今集』注釈は、特に『顕注密勘』が定家の注の加わったものであるということにも起因して、後代の『古今集』

注釈書に大きな影響を与えているようである。顕昭は、存命中もしくは没後まもなくは、和歌の実作者としてはあまり評価されず、定家が『顕注密勘』の奥書に記した「此道の勤学博覧これより後たれかはいでき侍らむ。まことの逸物にこそ侍しか」という言が示しているように、むしろ歌学者として高い評価を得ていた。その後の歌壇及び『古今集』注釈の世界では、顕昭の注釈はどのように受け入れられていったのだろうか。

そこで、本稿では、中世『古今集』注釈書における顕昭注釈の享受、さらには注釈者としての顕昭に対する意識を探ることをねらいとし、広島平安文学研究会刊『平安文学資料稿』第三期 第二巻に収めた『冷泉持為注古今抄』（以下『持為注』と略す）を例に取り上げて、顕昭のものとして引用される種々の説の確認を行いつつ、考察を加えていくことにする。

一 広島大学蔵本『持為注』の紹介

冷泉持為（応永七年（一四〇〇）～享徳三年（一四四〇））のものとして伝える『古今集』注釈書は、『平安文学資料稿』に収めた広島大学蔵本のほかに、近似した内容をもつ宮内庁書陵部の二本（三六六・五・鷹四一）、以下それぞれ抄・解と略す）や彰考館本等が存することが井上宗雄氏、片桐洋一氏等によって指摘されており、また奥書及び注の内容についての解説も加えられている^{②③}。

奥書については、諸本のうちで広島大学蔵本が伝来の事情を一番

よく伝えていられると思われ、以下に紹介する。

此集談議事去寶徳二天秋依

花頂殿様之御競望冷泉持為尊

舌所也仍而其序北野法浄院之明献

同應云々自明献文明九年春愚老

宗雅傳之記

文明九年三月日

此集談議事自北野法浄院明献

去文明第九春相傳仕訖然処今度之

紹慶御競望之間自愚老傳之処也

明應五^五〇(林鐘上旬)

いわゆる本奥書と書写奥書にあたるものと思われる。「花頂殿様之」の部分は、抄に「花陰被様々」、解に「本院被様々」、彰考館本に「花頭被様々」とあるなど諸本間の異同は存するが、意味するところは諸氏の指摘のとおりであろう。すなわち宝徳二年(四四〇)秋、「花頂殿」の競望に応じて冷泉持為が講じた注釈の、同聴した「北野法浄院之明献」による聞書を、文明九年(四四七)に「宗雅」が伝えたものと解することができる。但し「宗雅」は、広島大学蔵本のみに見える名である。この「宗雅」なる人物については伝不明とされている。また、書写奥書にみえる「紹慶」を含めて、その他の人物についても今のところはっきりしたことは分からない。

また注の内容面においては、広島大学蔵本と抄・解との間には奥

書と同じく多少の異同は存するものの、同じ系統に属することは明らかであり、それぞれ相互に誤脱を補うことも可能である。したがって本稿では、広島大学蔵本『持為注』を底本とし、抄・解との異同も視野に入れて考察を進めていく。

二 顕昭説の典拠の確認(一)

『持為注』において顕昭説が引用されるものは全部で十八例みられる。まずこれらを掲示される際の呼称によって分類し、そして説の典拠の確認を行う。なお、次に示す歌番号は、新編国歌大観に拠っている。

・ 顕昭かかけるものには： 五、一六、八六、八六、九二(五例)

・ 顕昭か説(顕昭か説、顕昭説、顕昭・〇〇説)には： 五、六、

・ 顕昭か心(顕昭心)には： 三、五、八(三例)

・ 顕昭は： 五、八(二例)

「顕昭かかけるもの」として顕昭説が引用される場合には、すべて『顕注密勘』に拠っていることが確認できる。一例を示せば、

①持為注古今抄卷第十七 雑歌上

(題しらす) (よみ人しらす)

八九 今こそあれ我も昔はおとこ山さか行時もありこしものを

此哥は、武内宿祢か哥也。心は、忠峯か加階の事のそめるころ、おとこ山に通夜し侍し時、夢にみえける哥也。我も

昔は男といはんとて彼山にそへたり。さか行は、栄行といはんとて坂にそへたりと當流にはあり。又顯昭かかけるものには、年老たる女今はかく老たれ共、わかかりし時はよきおとこにちきりてさかりをやりしとよめるとなん。されは序にも、おとこ山の昔をおもひいて、女郎花の一時をくねるなと、かけり。

「當流」には「忠峯」の夢に登場した「武内宿祢か哥」とするところを、「顯昭かかけるもの」により「年老たる女」の歌とする別説を追加している。これは『顯注密勸』の当該歌についての顯昭注の、

又或人の被申しは、年老たる女のいまはかく老たれども、わかかりし時は男にあひてさかりをやりきとよめる也と云へり。説人不知歌なれば、男女の詠いづれとさだめがたけれど、女の歌にて、をとこ山さかゆく時は、をとこにあひすみし事とは思がたし。但、此集の序に、男山の昔を思出てをみなへしのひと、きをくねるにも、歌にてぞなくさみけるとかきたる詞のつゞきは、此男山の歌に昔を思出たるを……

という部分をうけているのであろう。「古今集注」では、「教長卿云、としおいたる女の歌なり。いまはかくおいにたれども、わかかりしむかしは、をとこにあひてさかりおほかりきとなり。」とあって、『顯注密勸』にみえる「或人」は藤原教長であることが分かるが、引用傍線部がほぼ一致していることから「持為注」が引用しているのは『顯注密勸』の顯昭注であることが明らかであらう。

六六、六六番歌では、「顯昭かかけるもの」として引用される顯昭説が『顯注密勸』の顯昭注と『古今集注』との双方に共通しているものの、弄一六番歌では『顯注密勸』にしか当該歌の注がなく、このことから「持為注」が引用しているのは『顯注密勸』であることが分かる。但し、二六番歌に、

②持為注古今抄卷第四 秋歌上

秋立日よめる

藤原敏行朝臣

一六 秋来ぬと目にはさやかに見えねとも風の音にそおとろかれぬる

……さやかにとは、凜の字なり。明らかなる心也。又顯昭かかけるものには、清の字をさやかとよませたり。是は、きよき也。

・顯注密勸

目にはさやかにとは、目にあざやかにと云也。其を略してさやかにと云、或はさだかにと云詞を、さやかにと云歟。

〔さやか、さだか、大略は同。條忽と、さやかにといふ詞也。〕

清字をも用歟。あざやかに、鮮字也。〔

〕（一）内は定家の追注部分であることを示す。以下同じ。）

とあるように、「さやか」に「清」の字をあてる定家注を顯昭説としてあげることもあるようである。説の信憑性が疑われるような例ではあるが、いずれにしても「顯昭かかけるもの」とは『顯注密勸』を指すとみてよいであらう。

- また「顕昭か説」として顕昭説が引用される八例のなかで、六、
 二〇番歌の二例以外は典拠を確認しうる。これも一例を示せば、
 ③持為注古今抄卷第十八 雜歌下

(題しらす) (讀人しらす)

五三 鷹のくるみねの朝きり晴すのみ思つきせぬ世中のうき

この哥は、ある人譚奏ををひてよめる哥也。顕昭説は、く
 るみといふものをかくしてよめりとなん。

下句「思つきせぬ」の原因は「譚奏ををひてよめる哥」であるから
 だとする説をあげたあと、全く異なった視点で隱題の歌であるとい
 う顕昭説を追加している。これは『顕注密勘』の顕昭注の「是はく
 るみと云物をかくしたる歌也。藤原輔相が集に有。よく讀たる隱題
 の歌は、たゞの歌に入たるもよき也。……」という部分ををうけて
 いるのであろう。『古今集注』では簡略に、「此歌在藤六輔見集。
 くるみをかくせり。」とあるのみである。

この他の五、五三、五五番歌では『顕注密勘』の顕昭注と『古
 今集注』とがほとんど同文と言ってよいほど類似しているが、やは
 りこれも『顕注密勘』を引用しているとみてよいだろう。また六番
 歌では、先にあげた②の例と同様に顕昭説として『顕注密勘』の定
 家注部分を引用していると思われる。

- ④持為注古今抄卷第二 春歌下

題不知

読人不知

六 春霞たなひく山のさくら花うつろはむとや色かはり行

是は、花のうつろへるか、霞の色にかはりてしらく見ゆる
 とよめり。花のさかりには霞も桜色にて、花と一しかりつ
 れとも、今はしらく見えたるよし也。顕昭か説には、はな
 のうつろふとはちるにあらす、さかりなる時にかはりて、
 ちりぬへき色の付をいへりとなむ。

・顕注密勘

うつろふと云事、うちまかせては色變する也。うつろふ菊と云
 も、白菊の紫になる也。此歌にては散ると云べきかとみえたり。
 下の歌には、

春風は花のあたりをよきてふけ心づからやうつろふとみむ
 と。此歌も散心とみえたり。……

「花のうつろふ事はちるにはあらす。盛なる時にかはりてちり
 ぬへき色のつくを云也。いつの人まにうつろはんとや、心づ
 からや、皆同心也。菊のむらさきにうつろふにおなじ。梅も
 桜もまことにはうつろふ也。……」

『顕注密勘』によれば、顕昭は「うつろふ」とは一般的には色の
 変わるのだが、この歌の場合は散ることだとするのに対し、定家
 は盛りるときとは変わって散りそうな色の付くことだとしている。

『持為注』では、まず花が「霞の色にかはりてしらく見ゆる」とい
 う説を述べて、続いてその根拠をあげるような形で、「うつろふ」
 に関する『顕注密勘』の定家注部分にみえる説を顕昭説として紹介
 しているのである。『古今集注』には散ることだとする説のみで、

傍線部のような記述はない。

以上のように、「顕昭かかけるもの」として引用されるものすべて及び「顕昭か説」として引用されるものほとんどが『顕注密勘』によって説の確認を行うことができるのである。

三 顕昭説の典拠の確認(二)

これまでは顕昭説の典拠が確認できたのだが、「顕昭か説」として顕昭説を引用する六、二〇一番歌の二例および「顕昭か心」「顕昭は」として引用するものは典拠が確認できない。なかでも元、二〇一番歌の二例は『顕注密勘』・『古今集注』に当該歌注はあるものの、『持為注』で上げられた説に該当する記述は見当たらない。

⑤持為注古今抄巻第一 春歌上

くらふ山にてよめる

つらゆき

元 梅の花匂ふ春へはくらふ山やみにこゆれとしるくそ有ける

顕昭か心は、くらふ山とは、日のくるゝによせたり。闇にこゆれとは、其間に夜になると云儀也。當流には、春はかすみなむと立てかきくもりぬれは、空もくらき様なる故により、くらふ山とはよめり。闇に越れとは、くらふ山とよひかけたる故に、闇の様にこゆると云儀也。

「くらふ山」について、顕昭の日が暮れて夜になるという説をまずあげて、それに対立する當流の霞が立ったせいで闇の様に暗くなるという説をあげることで顕昭説を否定している。『顕注密勘』・

『古今集注』には「はるべ」に關しての記述しかない。

⑥持為注古今抄巻第二 春歌下

寛平御時きさいの宮の哥合のうた 藤原興風

二〇 咲花は千くさなからにあたなれと誰かは春を恨はてたる

此哥は多説あり。顕昭説には、花は千種なからあたなれとも、みな人おほかたにおしむ也。我ひとり春のくるゝまで恨はてゝありと花に云かけたる也。家隆説には、千種の花のあたなる恨も又春にあへは心よはくうちとけたると也。當流には、千種の花はあたなれとも、花にはうらみはさまてあらず、たゝ春の日かす故にかくうつろへると、春をうらむる也。誰かはかく心を付て春をは恨はてたると也。

秘傳。

この例では、「此哥は多説あり」として顕昭・家隆・當流の三説を対立する説としてあげている。先にあげた顕昭・家隆の説をいずれも否定して、最終的には當流の説を正しいものとするのである。その他の五例も含めて、説の典拠が確認できない例はすべて顕昭説と家隆説・家隆説・當流を二つ乃至三つ対立させて述べており、顕昭説は否定されるべき説として位置づけられているのである。

四 顕昭説の揭示の型の整理

こうしてみると、顕昭説の典拠が確認できる例とできない例とは、説を揭示する順序及び顕昭説の果たす役割が異なっているよう

である。そこで、顕昭説を引用する例の、説を提示する場合の型を整理してみると、次のようになる。なお、表中の歌番号を囲んだ部分は、典拠を確認できる例であることを示す。

1. 肯定型 顕昭説を肯定し、他流の説を提示しない。(三例)
2. 追加型 まず一つの説を提示し、容認しうる別説の紹介の形で顕昭説を追加する。(八例)

3. 対立型 顕昭説を含め二つ乃至三つの説を提示し、最終的に當流もしくは定家の説が正しいものとする。(九例)

	肯定型	追加型	対立型
顕昭かかけるもの	五六、六六	二六、六六、六八	
顕昭か説	三三	六六、三九、五五	
顕昭か心		六六、一〇、四四	三六、五五、六六、六七
顕昭は			

肯定型の例を一例示す。

⑦持為注古今抄卷第十七 雑歌上

題しらす

よみ人しらす

六六 いそのかみふるからをのゝもと柏もとの心はわすられなくに
ふるから小野は古枯小野也。もと柏とは、柞柏の事也。もと柏のもとゝいふ心は、顕昭かかけるものには、古き事をもと柏(のなとゝいひ、万葉には古人と書てもとつ人ともめれば、もと)をは古き柏といふへしとみえたり。

() 内は抄・解によって補った。〔もと柏〕とは「古き柏」の意であることを顕昭説を引用して述べている。顕昭説のみを掲示し、これを肯定する型である。

追加型の例には、先にあげた①④が該当する。それぞれ當流の説であろう一つの説を提示し、次に別説として顕昭説を紹介しており、特に顕昭説を否定するものではない。以上の二つの型においては、提示された顕昭説はいずれも『顕注密勸』により典拠が確認できるものである。

また対立型において、⑤・⑥のような説の典拠の確認できないものが九例のうち七例を占めているのは注目される。逆にいえば、顕昭説の確認できない例はすべて対立型に含まれることになる。いずれも最終的に當流もしくは定家の説を正しいものとするために顕昭説をまず先にあげている。あとの二例は、追加型のように當流の説、顕昭説の順で掲示するものである。ここで引用される顕昭説は典拠が確認でき、全く根拠がないわけではないのだが、「當流にはしからず」(五)、「當流にはしらす」(五五)とはっきり否定している。また「顕昭・定家の儀説各別也」(六七)とする例もみられる。

五 『持為注』における諸説の提示の型

では次に、「持為注」における顕昭以外の説の、典拠と説の提示の型との関係を考えてみる。但し、本書では「或説」や「一説」などと称して引用される説が多く登場しており、全ての説の典拠を確

認するのが難しいため、ここでは具体的な人物名・流派名が示される説をいくつかみるに留めておく。

定家説は、家隆説とともに引かれる十三例を含めて、全十八例すべてが他説と対立させて提示される。そのなかで説の典拠が確認しうるものは殆どなく、わずかに次の例が見出せるばかりである。

⑧ 持為注古今抄卷第二 春歌下

春の哥とてよめる

そせい

一三 おもふとち春の山へに打むれてそこともしらぬ旅ねしてしか

野遊の心也。おもふともとち、いつくともしらす行くれて、

旅ねするやうに、詠くらさはやと也。してしかのかの字は、
にこりてよむへし。ねかひの字也。秘傳。是定家卿説也。

家隆卿の心は、してしかのかの字をは、すみてよむへし。

其故は、野遊宴をのちにおもひ出してしたふ心也。されは、
かの字をは、哉といへり。

『辭案抄』に「たびねしてしがとは、してし哉といふ詞は、せばやと思ふことを、してし哉、ありにしがなとはいふ也」とあるが、これは引用したというより注の内容が一致しているというものである。

家隆説は、定家説とともにひかれる十三例の他には、先にあげた⑥の例が見えるのみで、定家説と同様にすべてが対立型で提示されている。また家隆説と一致する典拠というべきものは見出せない。

また「二条家説」として引用される説は、二条家の流れをくみ、応永十三年藤原満基の奥書をもつ百人一首の注釈書『百人一首満基

抄』からの引用であるとの指摘が、田中まゆみ氏によってなされている。これらは氏が「持為が、自説だけでは不十分なので、参考として、二条家説を引用したように思われる」とされるように、すべて追加型の提示である。

以上を考え合わせると、説の典拠が確認できるものは追加型の提示であり、対立型の提示では殆ど典拠が確認できない、という顕昭説の場合と同様な結果になると思われるのである。

六 中世『古今集』注釈書における顕昭説の提示の型

最後に中世『古今集』注釈書のいくつかにおける顕昭説の典拠と説の提示の型との関係についてふれる。

片桐氏が『中世古今集注釈書解題』第三、四、五巻に翻刻された行乘『六巻抄』、宗祇『兩度聞書』、飛鳥井雅親の講説の聞書『蓮心院殿説古今集註』、宮内庁書陵部本『古今集抄』所引『聞書』では、殆どが「顕注密勘」から説を引用しており、またそれらは肯定もしくは追加型にあてはまる。その他解題としてふれられた諸注釈書でも、『顕注密勘』を引用することが多いとされる。

ところが『毘沙門堂註』では、顕昭説が引用される六例のうち典拠が確認できるのは二〇〇番歌の「花まひなし」についての注のみであり、この例が追加型になる他は「其義不叶此歌心」(二七)、「難得心」(四二)と顕昭説を否定する対立型になっている。

こうしてみると、対立型の提示の場合、最終的に當流乃至定

家の説を正しいものとするために、否定されるものとして提示した説に他流の顕昭あるいは家隆の名を冠したのではないかとの憶測が生じてくる。片桐氏が指摘されているが、『持為注』は『毘沙門堂註』と同じく荒唐無稽とも思える本説を以て解く注の類に属するようである。典故が見出せない説を創出し、さらにその説に具体的な人物名を冠するといったことが行われた可能性もあるのではないか。室町中期以降一般となったという諸注集成による注釈書では、説の提示は追加型になると思われるが、集成というからにはあくまでも説の典故が存するはずで、『持為注』の類の注釈書はこれらとは異なった成立過程をとるものであろう。

おわりに

『耕雲口伝』に「顕昭法師が後裔はいまの世にはなきものところ多年心得侍りしに」とあり、同書成立の応永十五年(四〇)頃には六条家の歌人は歌壇から姿を消していたようで、当時の歌人にとって歌人顕昭は特に意識されなかったと思われる。しかし、『古今集』注釈の世界では、『顕注密勘』が依拠すべき書として多く引用されている。のみならず、新たに顕昭に仮託した言説を生み出し、それを否定する方法により、當流の説を賞揚することもなされている。注釈者にとって、注釈者顕昭はかくも強く意識されていたのである。

(注)

(1) 『顕昭・寂蓮』一三〇頁(三省堂 昭17・9)、『日本歌学

大系』別巻五 解題二五頁(風間書房 昭56・11)。

(2) 本文の引用は『日本歌学大系』別巻五に拠る。以下、歌学書の本文の引用は同大系に拠っている。

(3) 井上宗雄氏『中世歌壇史の研究 室町前期』一五一頁、補注四六三頁(風間書房 昭36・12、改訂版昭59・6)、片桐洋一氏『中世古今集注釈書解題』二七三―二八二頁(赤尾照文堂 昭48・4)、同書四一〇五―二四頁(昭59・6)

(4) 井上氏前掲書二〇頁。但し「宗雅」という名は、前田尊経閣文庫本『老のすさみ』奥書にみえる。島津忠夫氏『連歌師宗祇』(岩波書店 平3・8)に「然に今度彼和尚九州下向之時、於防州山口愚老所望出仕而伝授任訖。……文明十五天中秋中旬宗雅(花押)」「(二三三頁)と紹介されており、時代的にみて齟齬はない。氏は「大内氏抱えの山口の連歌師であろう」(一四四頁)と推測されている。上京し、宗祇らの百韻に加わったこともあるようで、あるいはこの人物が関わった可能性もあるのではないかと思われる。

(5) 田中まゆみ氏『古今集冷泉持為抄』の一性格―『百人一首満基抄』の引用に関連して(百舌鳥国文3 昭58・3)

(6) 本文の引用は『未刊国文古註釈大系』第四卷(清文堂 昭13・6)に拠る。

―やまさき・まさかつ、広島大学大学院博士課程後期在学―